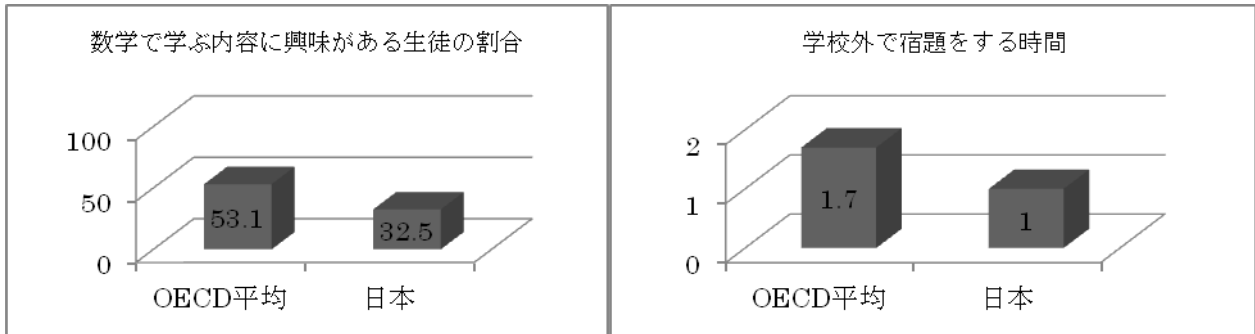


今、改めてキャリア教育を問う。

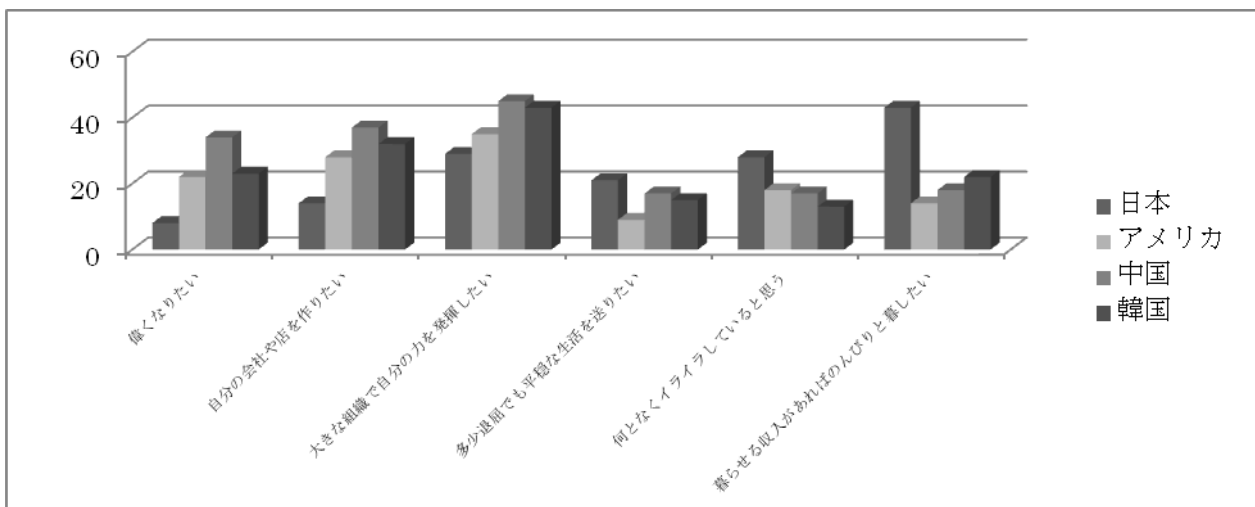
北海道札幌白陵高等学校 教諭 矢橋佳之

1 今の高校生をどうとらえるか

1 OECD（経済協力開発機構）『生徒の学習到達度調査（PISA）平成15年調査』



2 財団法人日本青少年研究所『高校生の意識に関する調査』（平成19年）

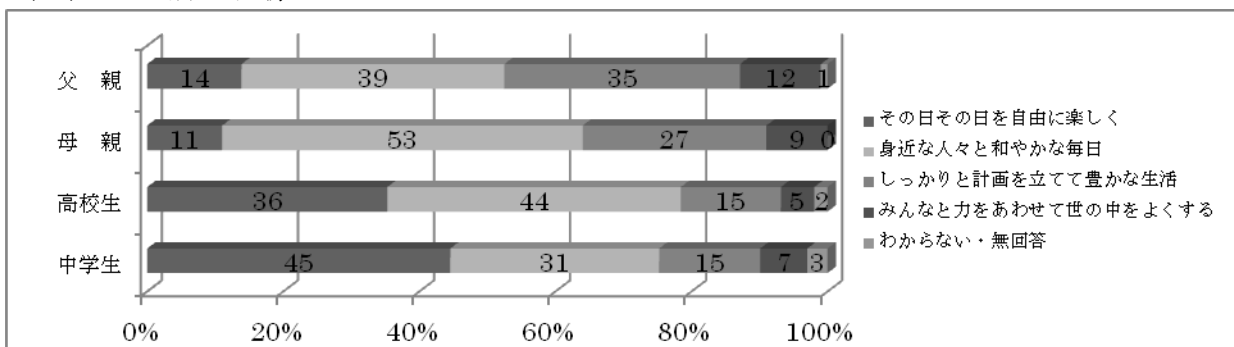


3 本校『教育ニーズ調査』（平成20年）

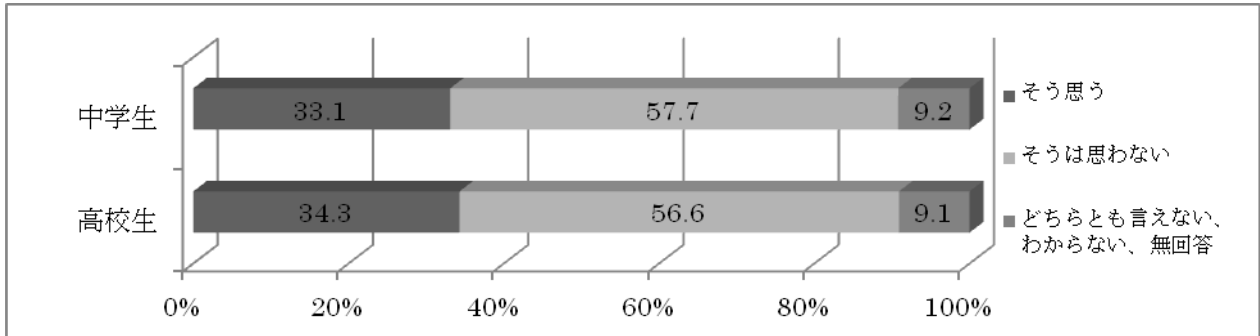
	1学年	3学年	保護者
勉強することが将来よい暮らしにつながると思わない	60%	66%	63%
日本はよい社会だと思わない。		86%	
日本の将来が明るいとは思わない。	80%	90%	94%
自分の将来が明るいとは思わない。	59%	71%	60%

4 NHK放送文化研究所『中学生・高校生の生活と意識調査』（平成15年）

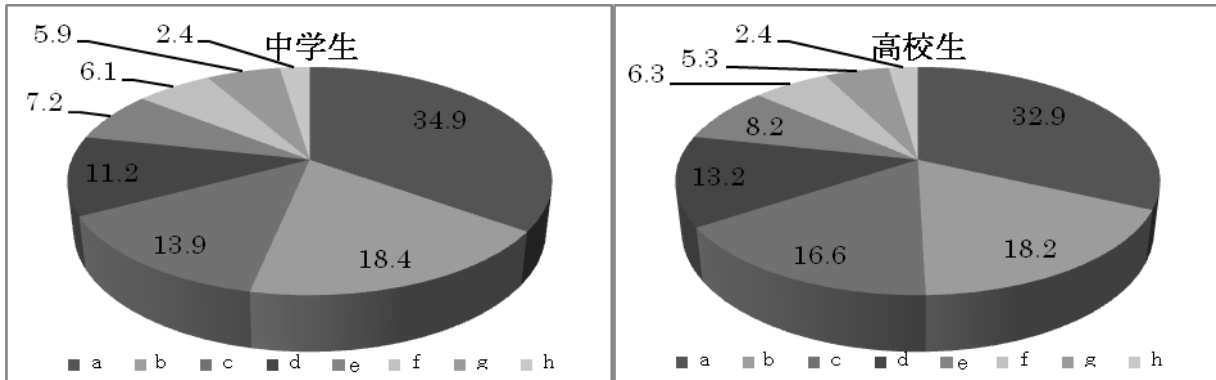
(1) 生活の目標



(2) 早く大人になりたいか



(2) - 2 「そうは思わない」と回答した生徒の理由



a 子どもでいる方が楽 b 大人になることが何となく不安 c 大人になって、仕事や家のことをちゃんとやっていける自信がない d 周りの大人はずるい人や自分勝手な人が多い e 働かなくてはいけない f 大人になっても特にやりたいこともないし、夢もない g わからない・無回答 h その他

上のデータにあるように、日本の高校生は他国の生徒に比べ、圧倒的に学習をしていない。また、大人になることやわが国の将来に肯定的なイメージを持ってなくなっていることも読み取れる。そのことが学習意欲を阻害している。

どうして、そのような状態に陥ってしまったのか。ちなみに、高校生が生まれてからのわが国の状況は下のとおりである。

- 誕生 バブル崩壊⇒不良債権、就職氷河期、リストラ
- H07 阪神・淡路大震災、オウム・地下鉄サリン事件
- H09 消費税増税（3→5%）、山一証券、北海道拓殖銀行廃業
- H13 小泉内閣～聖域なき構造改革、同時多発テロ
- H14 緩やかな景気回復（外需依存・内需はダメ）
- H15 大卒就職率 55%＝非正規雇用の増加、労働者派遣業の成長
⇒ワーキングプア、「格差社会」
- H20 世界同時不況
- H23 東日本大震災

今の高校生は経済的に冷え込んだ中で生まれ、若干の回復の兆しが見え隠れすると大きな問題が発生し、大きな凋落に見舞われ…といった繰り返りで未来に希望の持ちにくい時代に育ってきた。

この間、企業も大きく変わり、日本を支えてきた自動車産業ではその生産の大半をタイへシフトしている。日本企業でありながら、採用の大半は外国人という企業も増加しつつある。楽天、ユニクロ、日産自動車などの社内公用語は今や英語である。大学卒業者への要求レベルは、バイリンガルからクアトリンガル（4か国語を操る）へと変化しつつある。

経済動向の深刻化と同時に、採用環境の厳しさが加速度的に進んだ。大学を出ても就職できるかわからなくない。何とか就職できたとしても、会社がいつつぶれてしまうかもわ

からないので、一生同じ会社で勤務できるとも限らない。そのような不安だらけの状況の中で、少しでも安心したいと考え、大学生の大手志向が強まっている。

日本の若者が抱えるこれらの不安要素に理解を示さず、「高校生は学ぶのは“当たり前”」とか「学校段階が終了したら働くのは“当たり前”」といった旧来の“当たり前”を押し付けることが難しくなっており、“当たり前”の一步手前に存在する「学ばなければならない理由」や「働かなければならない理由」といった根本から考えさせるキャリア教育の重要性はますます高まりを見せている。

2 キャリア教育の新たな定義

「キャリア教育」という用語が公の文書に初めて登場したのは平成11年の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続改善について」（以下、「接続答申」と表記）であった。

キャリア教育は、当時聞きなれなかったNEETの問題が看過できなくなった社会情勢も手伝い、教育界のみならず実業界までも巻き込んでブームの様相を呈していった。

それから時がたち、平成23年1月の中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（以下、「在り方答申」と表記）において、改めてキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義しなおし、「職業教育」については、「一定または特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」として位置付けた。それにあわせて、育成すべき基礎的・汎用的能力として、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」が明示された。

なぜ、つきたい職業に必要な能力ではなく、「基礎的」で「汎用的」な能力なのか。かつてのように終身雇用が約束されていない雇用流動化の時代に、一人ひとりの人間がどのような状況になっても生き抜いていく力を身につけさせておくことが必要だからであろう。

3 これまでの「キャリア教育」の課題

では、キャリア教育なる言葉が誕生し、12年ほど経過した今、なぜ新たな定義が必要になったのか。「在り方答申」は、課題として「勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、現時点においては社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっている」ことを挙げている。さらに、平成23年2月の文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導研究センター発行「キャリア教育のさらなる充実のために一期待される教育委員会の役割—」において、各学校種のキャリア教育の課題が以下のように挙げられている。（すべて抜粋）

- | | |
|------|--|
| 小学校 | ・ 指導内容・方法が未開発で、夢や希望の育成といった指導に偏っている。 |
| 中学校 | ・ キャリア教育と進路指導との関連が図られておらず、本来の理念に反して出口指導に偏る傾向がある。 |
| 高等学校 | ・ キャリア教育の意義や必要性の理解が不十分で、従前からの進学指導や就職指導に終始する学校が少なくない。 |

これまでの「キャリア教育」は現代の若者が抱える不安要素に対して答えを出せていないことがキャリア教育を改めて定義しなければならなくなった理由だといえる。

では、これまでの「キャリア教育」のどこに問題が存在するのか。私は、生徒たちに以下のような思い込みが刷り込まれていないかと危惧している。

- | |
|-----------------------------|
| ① 職業につくことは「夢」であるという思い込み |
| ② 自分の好きなことを職業にすべきであるという思い込み |

③ 出会った瞬間自分にぴったりマッチする「適職」が存在するという思い込み

これらは一部の人間には是であるかもしれないが、一般化できることではない。

そもそも、働くことは「夢」ではなく、「現実」である。また、実際の職業選択時においては、地方によってはそもそも求人すらない状況であり、理想とする職業へのこだわりを持ち続けることは簡単には許されない。自分の好きなことを職業にすべきだという思い込みは、むしろ足かせになってしまうことがある。「適職」についても、生涯を共にするパートナー同様、出会った瞬間にすべてが一致するはずなどない。これがベストの選択だと信じ、すこしでも適合するように努力するからこそ、フィットしていくものであろう。

東京大学助教授（当時）玄田有史氏は以下のように指摘している。

大人は若者に「夢を持て」、「やりたいことをみつけなさい」という。しかし、夢ややりたいことがカンタンに見つければ、苦労はしない。日々の仕事の中で痛感する自分の限界や、それを乗り越えさせてくれた自分以外の何かに触れることによってだけ、本当の自分の姿、本当に自分のやりたいことは浮かび上がってくる。

平成 15 年 4 月 1 日 朝日新聞（夕刊）

同様に東京・白金高輪にある日本最高峰のフレンチレストラン「コート・ドール」のオーナーシェフ齊須政雄氏も以下のように語っている。

夢は全力の向こう側にしかない。全力を尽くさない人は夢に至らない。ここからずり落ちたら、もう後はないという危機感の中で走り続けるからこそ、人は水準を越えることができる。

『致知』2012年8月号 連載「二十代をどう生きるか」

職業社会を必要以上に美化し、憧れを抱かせる指導は現実世界にどうソフトランディングさせるかに課題が残る。それは職業選択で現実と直面した時に、「解決はご自分でどうぞ」では無責任である。それよりも生徒たちに必要なことは、幸せに生きるための態度や姿勢を身につけさせることである。学ぶことについても、目先の進学で受験科目として使用するかどうかを教科・科目を学習する判断基準ではないはずである。学ぶことは自らの可能性を広げることである。

特定の職業に就くために必要な最低限の知識・技能さえ身につければよいという考えに陥ってしまった人間は、その職業で活躍できる幅も狭い人材にしかなり得ない。

キャリア教育の課題として指摘されている「出口指導」から脱却できていない現状には、進路によって生徒を動機付けることによって、損得でやることやらないことを決めてしまう風潮を助長する危険性を内包している。

4 「ファスト(キャリア)教育」と「スロー(キャリア)教育」

翁曰く、遠きを謀る者は富み、近きを謀る者は貧す。

夫れ遠きを謀る者は、百年の為に松杉の苗を植う、
まして春植ゑて、秋実る物に於てをや、故に富裕なり。

近きを謀る者は、春植えて秋実る物をも、猶遠しとして植ゑず、
只眼前の利に迷ふて、撒かずして取り、
植ゑずして刈り取ることにのみ眼をつく、故に貧窮す。

夫れ蒔かずして取り、植ゑずして刈る者は、眼前利あるが如しといへども、
一度取る時は、二度刈ることを得ず。

蒔きて取り、植ゑて刈る者は歳々尽くることなし、故に無尽蔵と云ふなり。
仏に福聚海と云ふも、又同じ。

『二宮翁夜話』

二宮尊徳は上記のように述べている。

生徒に対する教師の姿勢はどうだろうか。ともすると「これをやったらどうなる」「やらなかったらこうなる」などの外発的動機付けに頼ってしまいがちである。すぐに生徒にいうことを聞かせるためには即効性があるからである。キャリア教育においても、働く理由として経済的側面などから「働かなければ生活できない」などという切り口だけで終わっていないだろうか。外発的動機付けは即効性があるのだが、その分効き目も長持ちしない。まさに近きを謀っている状態である。

人はなぜ働くのか。“働く”の語源は、“自分が好きなことができている”ではなく、“傍を楽にする(はた・らく)”である。経済的側面だけであれば、働かないほうが楽ではあるが楽しくはない。他人の役に立ち、そのことで社会から愛されること。それは仕事を通じて実現できることである。本校では日本理化学工業株式会社の障害者雇用と「4つのしあわせ」の話などを使ってそんな働く理由を伝えている。

これらのような内発的動機付けも含めさまざまな動機づけを行うことが、自らとわが国の未来に不安を抱えている今の生徒たちには必要ではないだろうか。

夏目漱石が『道楽と職業』で述べているように、自給自足状態から職業分化というものが起こったという前提から考えると、私たちがすべてを行わなくなった以上、誰かにそれを依存しなければならない。そして、その依存したものを手に入れるためには、私たち自身が誰かの役に立たなければ職業が分化された世の中は成り立たない。

働く理由についても自分の生活などのためといった利己的な動機づけをいかに世のため・人のためといった利他的な動機づけに近づけるかが、社会で愛される人間を育てるうえで大切な視点だと考えている。

食べ物の世界で手間がかからず・安価な「ファスト・フード」と伝統的な食文化を見直すとする「スロー・フード」とがあるように、教育にも「ファスト教育」と「スロー教育」があると仮定する。いわばすぐ効果が表れるが、すぐ効果が薄れる外発的動機付けを重視する「ファスト教育」に対し、本質は何かを見極める内発的動機づけを重視する「スロー教育」といったところであろうか。

目先の出口指導や勤労観・職業観の育成に偏っていると指摘されたこれまでのキャリア教育は、いわば「ファスト教育」が中心だったということである。それに対し、新しい定義が示す基礎的・汎用的能力の育成を図ろうとするキャリア教育の新しい定義は、今までの指導に「スロー教育」の要素を高める必要性を示唆している。

出口の進路決定率に縛られ、そこから逆算する指導だけでなく、どのような環境になっても進路決定に耐えうる基礎体力の育成を図る指導も組み合わせることで、確実に力を備えた人間の育成が求められている。